

# 梁啓超の家庭教育論

— 「趣味」による素質の開発を中心に—

教育学コース 桂 燕 玉

Liang-QiChao's Discourse on Home Education:  
Development of Character Based on "Taste"

YanYu Gui

The starting point of education is the family. It is said that parents are a child's first teachers, and that they are teachers for a lifetime. What does this mean? This paper aims to construct a theory on home education by tracing the family history of Liang-QiChao, a figure influential in modern Chinese society, and by examining his discourse on "Taste" central to character development.

## 目 次

- はじめに
- 梁啓超と教育論
  - 梁啓超の家族と教育論の背景
  - 梁啓超の教育論の精髓—「趣味」論
- 梁啓超の教育実践
  - 伝統的な家庭教育と子どもたち
  - 父親の手紙—教育実践
- まとめと今後の課題

### 1. はじめに

本論文の目的は、近代中国におけるある知識人—梁啓超の人生の後半における家族への手紙を手がかりに、彼の教育論について考察することである。とりわけ梁啓超のこだわった「趣味」論の源流を具体的に分析し、またその理論の家庭内での実践を通して、家庭教育論の理論構築を試みることである。

梁啓超は、19世紀末から20世紀初にわたって、転換期の中国で多くの知識人に広く影響を与えた人物である。彼に対する評価は、清末の変法運動を起こした維新派のリーダー、啓蒙思想家、中国近代史上西洋に真理を尋ね求めた代表的人物、著名なブルジョア階級の政治家、保皇派、反動派、学者など実にさまざまである。彼の人生は大きく二つの時期に分けられるが、前半の30年間は政治権力をめぐる各派の闘争に積極的に参加し、「それぞれの時期にそれぞれの作用を發揮して、近代中国の歴史において非常に大きな影響力」<sup>1</sup>

を持った。後半となる1917年末からは政治活動をやめて、学術研究に没頭した。彼の生きた時代は近代中国における大きな転換期であり、思想の転換期であるがゆえに、「いささか複雑な歴史的人物となった。」<sup>2</sup>

梁啓超は、人生の後半に学術研究を中心にするようになるが、それはまた「政治学、歴史学、文学、哲学、社会学、新聞学、教育学、経済学、法学、宗教、美学など広範な領域にわたって功績をたてたため、百科全書のような学術大師とも呼ばれていた。」<sup>3</sup>教育に関しては、終始一貫「興学校、養人才、以強中国（学校を作り、人材を養成することで中国を強くする）」<sup>4</sup>という理念を掲げ、社会転換期におけるその在り方を指し示した。また『変法通議・女学を論じる』<sup>5</sup>のなかでは、国家の富強を最終的な目的として、女性の知力と体力の強化を図ることを訴えた。このような努力は彼の前半の政治人生と深くかかわってきた。本論文では、政治から離れた後に着目し、とりわけ彼が、自分の子ども宛てに出した手紙を手がかりとして歴史に期待された人物の人間性を見出し、教育の実践者として役目を果たしたところに関心を置くようにする。いままで、彼の教育思想、国民教育論、女子教育論、学校論や、あるいはそのような教育理論と社会を結びつけた研究はないわけではなかったが、彼は教育実践者としてなかなか評価されず、さらに「彼は高明な教育家でもない」<sup>6</sup>という評価もある。しかし、彼は政治舞台から降りて、人生の後半には基本的に大学の教壇に立ち、また大学の学生のために全国を回りながら講演も行った。これだけのことであれば、彼自身もいったような

「非教育家」<sup>7</sup>であるだろう。本論文では、あえてそのような現場から離れた彼の家庭に注目する。つまり、教育の実践の場を彼の家庭とすると、実践者は父親である彼になる。そのことによって、彼にとって家庭はいかなる意味をもっていたのか、また家庭教育がどのように成り立っていたのか、具体的に彼のこだわった「趣味」論との関係のなかで分析・考察を求める。近代になって、人間の自由・権利などの主張が母性論にもつながっていたものの、「役割」、あるいは教育の主役としての父親は研究の対象には多くならなかった。本論文では、研究の範囲を家庭教育というところに限定づけることで近代父性論についても再考察することを兼ねる。

梁啓超には、9人の子どもがいる。そのなかの7人はアメリカ・カナダに留学した後、全員帰国して中国のさまざまな分野で大きな業績をあげた。3人の子どもは中国科学院の院士<sup>8</sup>に選ばれ、「一門三院士（一つの家庭に三人の院士が出た）」という美称もある。<sup>9</sup>梁啓超の子どもの得た名誉は稀であるが、最近家庭教育の方法論などで、時に梁啓超の家族の子どもたちが取り上げられることがある。ところが、このような研究では、単純に日常的に愛国心教育、道徳教育、知識を追求する教育をしたため、教育に成功したという単純な結果論が見られる<sup>10</sup>。ところが、なぜこのような子どもを育てることができたのか。その当たり前のような結果よりも、その家庭背景、教育の過程、教育思想の働きなどどのようにかかわっていたかの研究はほとんど見当たらない。本論文では、手紙を通した家族史により、彼の家族観、とりわけ子どもとのかかわりに注目し、家庭教育論を試みることにする。

## 2. 梁啓超と教育論

### a. 梁啓超教育論背景

梁啓超（1873-1929年）は、1873年2月23日、広東省新会県熊子郷茶坑村で生まれた。11歳で「生員」<sup>11</sup>となり、16歳にはすでに「挙人」<sup>12</sup>となった。彼の家族は、「新会に移り住んで以後、十代にわたって農業をなりわいとし」ながら学問を修める「寒士（貧しい士大夫）」の家族であった。

彼の祖父は、「教諭公にいたっては初めて学問に励み、宋明の儒者たちの義理名節の教えを子孫に遺した。（中略）祖父は継母、庶母にも孝養を尽くし、勤儉実直で、自分の行動には細心の注意を払わせる一方、誠実で慈しみ深く、人に対しては行き届いてい

た。また家を治めては厳格、子どもをしつけては謹厳、孫たちを教えては詳細かつ明晰であった。」<sup>13</sup>彼の父親は、「慈しみ深いとともに厳格であり、勉学を監督するだけではなく、労働もさせた。言葉や挙動に少しでも不謹慎な所があると、その都度いささかの仮借もなく叱責」する人物であった。彼の母は、「賢明考順をもって知られた方で、温和善良の徳は、郷里の者ならだれでも知っていた。」<sup>14</sup>

その彼が、1891年、18才になる時、師匠康有為に出会った。その時から、彼は中国の歴史を動かす一人の人物となっていく。1898年、変法運動に失敗して、日本に亡命した。1912年に帰国し、康有為と主張の分岐が生じた。帰国した後、民国の官僚（司法総長、貨幣製造局総裁、財政総長などに任命された）になったが、1917年11月に政治舞台を離れた。1918年12月から、1年あまりの時間をかけてヨーロッパを遍歴した。この遍歴に基づいて1920年に『欧遊心影録』を完成し、中西文化について真剣に考え始め、なおかつ学術研究に没頭しはじめる。

それ以前の前維新时期に打ち出された梁啓超の教育論が、「興学校、養人才、以強中国」である。この主張は、彼の政治人生のなかで、中国社会全般に残したもっとも大きな遺産である。すなわち、教育によって民と国家をつなげようとしたことを『新民説』<sup>15</sup>のなかから読み取ることができる。このなかで国を救うにはまず民を救うべきで、「新民」を造るのが国の第一歩で、学校を作り、人材を養成するようにと主張した。これは、彼の政治舞台における教育論であった。政治から離れてからは、清華大学、南開大学、燕京大学の教壇に立ち、また全国に講演に出かけた。国学<sup>16</sup>をさらに深く研究し、中国と西洋の文化の比較を通じてその意味を真剣に考え始めた。この時期の教育論の真髄はまさに「趣味」論による素質一人格完成論と言って良い。「人間は必ず常に趣味のなかに生活すべきであって、そうすることで生活が価値のあるものになる。苦しげな顔で何十年も生きてとしても、その命は砂漠になってしまう」、「仮にだれかが私に信仰は何かと聞いたら私は私の信仰は趣味主義だと躊躇なく答える。また誰かが、あなたの人生観は何を根拠にしているかと聞いたら、私は趣味を根拠にしていると即座に答える」、「私は自分が一人の趣味主義者であることを認める。人間であるならば、常に趣味の中に生活しなければならない。これこそ価値のあるものだ」「仮に‘梁啓超’というものの化学成分を分析するとしたら、そのなかから‘趣味’という元素を取り除いたら、おそらく残りはぜ

口になるだろう」<sup>17</sup>と繰り返して人生の本質であるべきものは「趣味」であることを主張し、それを自分のみではなく、家庭という実践の場に貫いた。

## b. 梁啓超の教育論の精髓—「趣味」論

「趣味」についての論調は、梁啓超の著作のなかでは、1922年4月10日直隸教育聯合研究会における講演である『趣味教育と教育趣味』と、1927年1-3月の雑誌『司法儲才館季刊』1期に連載された『学問の趣味と趣味の学問』という文章の中でもっともまとめで論じられている。

では、彼の「趣味」論というものはそもそもどのようなものであったのだろうか。

中国の漢字の解釈<sup>18</sup>からみるならば、趣味の「趣」はもともと「趨」と同じで、「疾走（早足で歩く）」という意味である。呂宏波<sup>19</sup>の研究によれば、その意味が徐々に「動作の方向」から「精神の意向」という意味に変わっていく。魏晋南北朝の時期に至っては、陶冶の意味を表し、「気」「韻」「趣」「味」「神」「風骨」などで人物を評価した。「趣」が人物の個性である「風趣」「情趣」を表すようになった。この時から、「趣」が本当の美的観念となった。「味」は「味覚」という意味で、主体感官を表している。以上のような「中国の伝統的な意味を近代的に転化させたのは梁啓超」であった。「中国の文化は客観と主観、心と肉体の間に絶対的な限界がないがゆえに人間と自然は絶対的な分離と超越という観念が少なかった。それはお互いの分離のなかで合があり、合の中に分離があるということである。このような中国人の伝統的な美意識のうえに、梁啓超は「情趣」「樂趣」の「無利害性」と人生の価値と意味としての支えをさらに加えて強調した。趣味主義は「無所為而為（何かがないためにやること）」であって、「有所為而為（何かがあるためにやること）」ではない。すべてがある趣味を手段として、他のことの目的とし、目的に到達するとすぐにこの手段を捨ててしまうので、趣味が生じるということは必ずこの目的関係を脱するべきである。つまり、彼は、あることを道具と手段として見てしまうと、利害的な関係になり、深くなお持続的に趣味を持つことができない。だから、人はつまらない損得勘定はやめ、やりたいことをやり、優柔不断にならないことを強調した。「趣味」とは間違いなく「快樂」「樂觀」「生き生きすること」であって、趣味と美的感覚の内在的な一致、趣味は本質的には美的感覚と自由であることを強調した。<sup>20</sup>彼がいつも自分の信仰は趣味主義であり、

自分の人生を趣味に根拠にしているといえたのはまさにここにあった。このように彼は「趣味」を人生の価値と意味としていたのである。

したがって、梁啓超はこのような「趣味」を「趣味教育」につなげようとした。青少年はちょうど人生のなかでもっとも趣味にあふれる時期に入っているため、この時期の教育が妥当でないと彼らは「高等の趣味について嫌悪を感じ、きっと校外でレベルの低い趣味を求める」<sup>21</sup>だろう。彼はこの肝心な時期に必ず青少年に積極的で、趣味のある教育をし、有用な知識を得させるようにすること、同時に、積極的な人生観を立てるように呼び掛けた。彼は「趣味は生活の原動力であって、趣味を失うと生活は無意味になる。ところが、趣味の性質はすべてがいいわけではなく、必ず選択すべきである。（中略）われわれ趣味教育を主張する者は、学生に一生享受できる趣味を与えなければいけない。そのことによって、教育の方法も解決できる。教師が若し教育上で趣味を感じなければ、私は彼に早めに仕事を換えることを勧める。」といった。

では、梁啓超にとって趣味となるものは何なのか。彼は、趣味にはふたつの条件があると考えた。一つは自分で悟ることで、「ちょうど水を飲むように、水の冷たさは自分しか分からない」<sup>22</sup>ことである。二つ目は、趣味は永久に存在するもので、あることを始めて趣味とは反対の結果が出るとそれは趣味の目的にならず、「趣味」とは外の影響を受けない永久なものである。「まるで川の風のように、山の上の名月のようである」<sup>23</sup>と「趣味」の自己感覺性、永久性を示した。ここで彼は学問を例として取り上げており、「道徳の範囲に入るものとしてそれを提唱しているわけではない。ただそれが私にとっては趣味から始まり趣味に終わるからであって、私の趣味主義にもっともふさわしいからである」と述べた。したがって、「物質的な生活に携わる人も少なくとも一、二件の精神生活を見つけないと生活が無味乾燥にならない」と学問以外のことをやる人たちにも趣味を勧めた。ただし、これらの「趣味」は深く研究することと、交替的に研究することも勧めた。このようにして彼は毎日趣味で忙しくしていたが、このような人生がもっとも「合理的であり、精神的に気楽である。」<sup>24</sup>と楽しみに述べた。「かりに物質的な生活のみを求めると客観的な制限と反動を受けやすい。だから非趣味的である。このような非趣味的な生活は電報を打つように精神的に苦痛を感じさせる。私は物質的な生活に反対するのではない。ただその中で他の一、二件を探して精

神的な頼りを求めるべきである。』<sup>25</sup>

彼のこのような「趣味」論理は、実は「五四運動」の後、西洋の科学的な文化が中国に入ってきて、「科学をもって宗教に換えよう」とした科学唯一主義に抵抗するなかで現れた。彼は「人生の問題の大部分は、必ず科学的な方法で解決すべきである。しかし、一部の小部分、あるいはもっとも重要な部分は超科学的である」<sup>26</sup>と、科学唯一主義を掲げるものが残した結果として、伝統的な儒家倫理を中心にしてきた世界観と人生観との分裂をもたらしていると述べた。彼は科学的方法で解決しにくい問題は「趣味」によって解決すべきであると理解していたのである。

以上のような「趣味」の趣旨のうえに、梁啓超は「趣味」完成のために、「責任感」と「知不可而為（できないことを知りつつやる）」主義という原則を提示した。「私の人生観というのは責任感と趣味であることがわかる。責任感というのは強制的に任務を肩に置くことで苦しいものであるが、趣味は面白いものである。両者は一見反しているが、私は常に両者を調和させている。だから、私の生活は乱れるほど忙しくて、複雑であるが、もう一方では落ち着いて、楽しいのである」<sup>27</sup>と述べた。もう一つの「知不可而為（できないと知りつつやる）」主義は、彼にとってはあることに取り組むさい、これがどんな効果がでるか予測がつかない、あるいは何の効果もでないことがあるかもしれないとしても、一生懸命にやることを勧めた。「私はこの人生で曾文正<sup>28</sup>の莫問收获、但問耕耘（収穫は聞かず、耕しは追及する）をもっとも好んで感動している。」このような態度で学問をすると、雑念がなくなり、研究を夢中にでき、自然と願うものが収穫できると強調した。

このような考え方は、政治から降りて、儒教の中庸哲学、仏教研究に専念したこととも大きくかかわっていた。このなかで、彼にとっては「人生の最大の目的は人類全体に対して貢献すること」<sup>29</sup>であって、このような人生の最大の目的を追求するためには、精神生活が重要である。さらに人生の後半にはこの精神世界を東洋世界で見つけることであると主張した。「東方の人生観は中国、インドを問わずみな物質は第二義的で、第一義は精神である。物質は精神生活のための一種の道具に過ぎない。」このようなことから、梁啓超は美善合一の理想的な人格をもっとも崇拝していた。なぜなら「美善相楽（美と善を互いに楽しむ）」これは儒家のなかで最高の人格とみられていたからである。どのようにしたら儒家の人格主義を実行できる

のか。「性」「情」を完璧にすることである。個人の完璧だけではなく、社会の完璧に至ることであって「修己安人（自己修養をすること人を安心させるためである）」の目標に至ることである。これが、まさに彼の「趣味」の人生哲学であった。ところが、結局のところ梁啓超は哲学者というよりも歴史学者であったため、あくまでも西洋的な思考と方法をもって、再び中国の古典文化を探索し、中国文化中心（本位）の新しい文明を作り上げようとした。「西洋の文明をもってわれわれの文明を拡充し、またわれわれの文明で西洋の文明を補うべき」<sup>30</sup>であって、それによって、心と物の調和を実現することである。

「趣味」を最高の先生と思った梁啓超は、どのように「趣味教育」を実行していたのか。その実践の場として彼の家族、子どもとのかかわりを見ていくことで、「趣味」による素質一人格形成論を見ていくことにしよう。

### 3. 梁啓超の教育実践

#### a. 伝統的な家庭教育と梁啓超の子どもたち

梁啓超の教育実践を論じる前に、まず彼の生きた時代—近代転換期中国における家庭教育について若干触れてみる。つまり、中国では、家庭はどのようなものにとらえられていたか。そのなかにいる子どもはどのような状態にあったか。その教育はどのようになされていたか。親はどのような役割を果たしていたか。ということから梁啓超の家庭の普遍性と特殊性を見出すことを試みる。

中国は家族制度の影響を深く受けていた国である。中国で伝統的な家庭は、「父」と「子（基本的に男の子）」を基本単位として、「父慈子孝（父の慈、子の孝）」という基本関係がある。家庭教育の主な内容も儒教的な修身教育であった。孔子が指摘した「学而優則仕（勉強して官吏になる）」のために、勉強を励ますことがまた一つの重要な役割であった。<sup>31</sup>その「仕」になるのは厳しい科挙試験によって得られるもので、辿りついた家庭は世間の注目を集めた。その家庭教育では「詩」を重んじていた。中国にとって、詩は情操陶冶の源泉であったからである。つぎに、子どもに秩序を教え、対人関係の道である仁を守るようにした。つまり、家庭にあっては親に対し兄弟姉妹に対し、また社会生活では他人に対し秩序を正しく守ることを教えたのである。このような孔子から始まった儒教の家庭教育の根本的なねらいは人間形成にあった。それは、儒教の教

養が家庭に基盤を置き、人間としての完全さを厳しく求めたからである。近代になると「名門家族」とみられ、政治的な名門あるいは商業上の名門などが現れるが、このような名門より文化的な名門の発生、発展の方が現代中国社会の憧れとなっている。梁啓超の家族は文化的な名門であった。梁啓超の家族は「寒土」家族であったとしても、伝統文化の教養を持って、西洋的な教養を実践しようとした。そこにはたえず梁啓超が拘っている「趣味」論があった。またそれが家族、子どもとのかかわりのなかでのびやかに再現された。梁啓超は堅実な国学の知識、厚い愛国心、新しい知識を受け入れる包容力によって、伝統と近代化という常に二重の文化修養を表していた。彼が子どもに教えたのは健全な人格であって中国と西洋の合一した態度で子どもの学業と事業の選択をするようにした。積極的な人生観を樹立し、意志を強め、科学的な態度で学問をし、また現実的なものから学問をするように指導した。

では、梁啓超は家庭のなかで父親としての「役目」をどのように果たしたのであろうか。かれはいったい何を子ども伝えようとし、そして子どもたちは父親から何を受け取っていたのであろうか。

まず、彼は個人の存在について、「人は単独では存在できない（中略）世界のある一部分が「我」だ、と言うのは正しくない。（中略）社会面について言えば、私と父母や妻子との間には、結局どれほどの区別があるのでしょうか。多くの人々―必ずしも篤実で孝行な者ばかりではない―は父母のことを自分よりも重要だと考えているが、これは「我」の父母が私の身体の「我」を抑圧することにほかならない。また夫婦の愛においても、妻はその夫、夫はその妻を自分より重要だと思っている。」<sup>32</sup>という仏教と儒教の「無我」について述べて、「無我」によって個人の本当の存在意義を表すようにした。

それゆえ、「先天下之憂而憂（天下の憂いに先んじて憂い）」<sup>33</sup>、「人類一父母、妻子、友人、国家、世界一のために苦しむ」<sup>34</sup>ことで、私的な憂いが取り除かれ、煩惱を免れることができると示した。彼が常に快楽を感じ、悲しみや愁いによってもかき乱されないのは、「この信仰の光に照らされているからなのである。私は今や老いぼれであるが、興味は尽きることなく、精神は衰えることがないのも、この人生観に依拠しているからにほかならない。」<sup>35</sup>このような人生観が、彼と家族、子どもとの深い絆を結んでいたのである。

## b. 父親の手紙―教育実践

次に、1919年から1928年の約10年にかけて梁啓超が、子どもたちに出した手紙―「家書」を手がかりに彼と家庭との絆、またその絆によって見えてくる家庭教育の実践を検証してみたい。

彼の人生のなかで1918年はまた大きな転換期であった。政治の舞台からおりて、ヨーロッパと出会い、学問に夢中になり、大学での教授・講演など異なる活動を重ねる時期であった。そのころから子ども宛てに書かれた手紙が北京出版社『梁啓超全集』21巻の「家書」にまとめられている。1911年9月19日から1928年10月27日に書き残された手紙の数はおよそ340通に及んだ。その父親の手紙に対して子どもたちも必ず返信を書くようにしたことがわかる。彼の子どもたちの多くがアメリカ・カナダに留学中で、そのつながりが手紙<sup>36</sup>であった。これらの手紙の内容は実に広く、健康・家族の報告から国事、講演のこと、子どもの勉強への励まし、自分の著作のことなどが書かれていた。

まず、彼は子どもに対しては情にあふれた「慈父」であった。自分の子どもたちにさりげなく「私のbaby」「大きなbaby」「小さなbaby」「向こう側にいる私の子どもたちよ」「私はあなたたちをもっとも愛しているよ」などと手紙で表現した。そして、彼は常に9人の子どものモデルになることを意識した父親であった。「私は常に自分が青年たちのモデルになることを意識している。少なくともあなたたちには堂々たるモデルになりたいと思っていた。」

このように、彼は子どもの「趣味」と「選択」を尊重した。子どもたちの選択が建築学であり、考古学、図書館管理学であるとき、まず子どもの選択を尊重し、そのうえに、適切かつ理性的な助言を加えた。

1925年7月<sup>37</sup>、カナダに留学している次女思荘が大学を選択する時期であった。当時、彼は自分の気持ちとして、娘がカナダで大学に通うことを望んでいた。なぜなら、「全家族がアメリカ風になることは、実にいやなことである。だから、あなたにはアメリカ以外の大学で、二年間勉強することはもっとものことだ。」<sup>38</sup>なお、近代生物学が当時中国ではまだ空白であったことを考慮して、また子どものなかで自然科学に携わる子どもが出てほしいこともあったため、そのうえ「生物学は現代で最も進歩した自然科学であって、哲学社会学のために主要な基礎になる。ゆえに、極めて趣があり、女性に適切だと思う。帰国後、中国の生物を至るところで採取して実験すると新しい発見も容易にできるだろう。今日中国の女性のなかではま

だこの学問（男子も少ない）をする人がいないので、あなたが「先駆者」になる<sup>39</sup>ことを望んでいた。彼は、生物学はすべての人文科学と密接なかかわりがあるし、父親のためにも大いなる手助けになると考えてこの学問を勧めたのである。ところが、思荘は生物学の授業に対する興味を引き起こさなかった。そのことを知った彼は、「すべての学問は自分の性格に合うものを選択すべきであって、そうではない場合中途半端になってしまう。あなたが私のもとを離れてからだいぶ年月が経っていて、最近の考えについて私は知らないはずである。だから、私の推薦が必ずしもあなたに合うとは言えない。自分をよく知って、姉兄と相談すべきである。私があなたの学問の道を邪魔したのではないかと思って、この手紙を急いで出すことにした」と反省の手紙を出した。思荘は、自分の趣味によって図書館学を専攻し、その後、中国の有名な図書館学専門家となった。

彼は子どもが自分の「趣味」で選択したもの一学問の道をあきらめず地道に歩けるように励まし続けた。カナダで勉強している次女思荘が英文の成績で悩んでいる際にも、手紙を書いて応援した。「絶対あせらずに、さらに落ち込んではいけぬ。学問を求めるには自分次第である。」「あなたがこのぐらいの成績でも私は満足している。あなたは一年早いので、順番が上がってきた西洋の子どもと競争し、三十七人のなかで十六位になっても、大変頑張った。焦る必要はない。」<sup>40</sup>

最も大事にしたことは、子どもが「趣味」によって選択した学問でも、ほかの「趣味」、一般常識的なものを加える勉強方法を取るようにしたことである。<sup>41</sup>アメリカへ留学した長男思成に対して特に「時間を取って常識的なものをたくさん勉強しなさい。とくに文学、或いは人文科学の中のある部門について少し時間をかけて勉強しなさい。私はあなたが勉強しているものがあまり専門化しすぎて、生活も単純無味になるのではないかと心配である。あまり単純な生活は、疲れやすく飽きる。飽きると悩みができて、結果的に墮落の源になりうる。」「学問というものは常に猛火で茹でて、その後、弱火でじっくり煮込むことを交互にやることである。弱火で煮込むことは消化的な役割をする。」また自分自身の経験も加えて「私のこの一生は趣味が多すぎる。自分のやることに対していつも興味津々で、極まりない。悲観とか世を厭うなどという言葉は私の辞書にはない。」と息子の参考になるようにした。次女思荘にも専門科目を勉強する以外に、音

楽・文学・美術などを選択するように勧めた。「専門知識を学ぶ以外に、一、二ぐらい趣味に合う学問を選びなさい。たとえば音楽、文学、美術等である。聞くところによると、最近文学の本をたくさん読んでいるそうだけれど、とてもいいことである。あなたはもともと音楽の才能があったため、少し努力して、それがさらに伸びるようになるのは良いことである。ところが、努力しすぎて、病気になったことがあるそうだが、子どもの時から健康であるから別に心配はしない。学問はもともと猛烈にする必要がないものだ。缶詰のように無理にたくさん入れても良い効果がでない。」このように、かれは教育の全面性を主張し、知識の関係性を重視した。知識を求めることは階段を上るように、一つ一つ進まないといけぬと彼は考えていたからである。

彼が、子どもに繰り返して求めたことは、自分の「趣味」によって、選択し、また最善を尽くすこと、「人格の鍛錬」を通して、「寒士家風」を樹立することであった。鍛錬は優劣の環境を構わず<sup>42</sup>、常に行うことをもとにした。彼は常に「乱世に生きているため、苦勞をしないと、才能が発揮できない（もちろん乱世だけではない）。物質上の享受は、生計さえ維持できれば充分だ。快樂か否かは、物質が決めるものではない。苦勞の中で楽しさを見つけることこそ、本当のことである。」<sup>43</sup>「莫問收获，但問耕耘」，そのことによって「天道酬勤（自然と報酬を得られる）」、勤勉に働く人はいつも収穫ができると子どもを励ました。実践することに対して非常に重視した。そのことに対して彼は長男思成に<sup>44</sup>「自分の才能が自分の理想に追いつかないと思い、画家のように毎日つまらない努力ばかりだという気分になったら、それはあなたの学問がまもなく進歩することを暗示するだろう。私はそれを聞いて非常にうれしい。孟子曰く‘能与人规矩，不能使人巧’すべて学校で教えたもの或いは学んだものは規則的なものである。不規矩方面的事，巧みにするならばそれは学校外で発見できる。規則は巧みのためのものである。中国の古人が言ったように「読万卷書，行万里路（本をたくさん読んで、たくさん見歩く）」すべきである。将来学んで帰ったら、常に機会を作って自分の環境を変え、自分の視野と志を広げたら、その時にはあなたの才能が無限に開花するだろう。今はまだその時期ではない。」このように学問を成し遂げるにあたっての自己鍛錬の方法を教えた。そして、学問をするとき、視野を広げることを子どもに勧めた。現実的な状況から出発することを勧め、政治

を離れた本の虫になることに反対した。学んだものは使うことを強調し、子どもの実践力を重視した。長男思成の夫婦がアメリカの留学から戻ったら「行万里路」に勧め、ヨーロッパへの旅をさせ、その建築物と人々の人情や民俗を見聞するようにさせた。<sup>45</sup>

上述のように、梁啓超は常に「伝統」と「近代化」という二重の文化修養にこだわって、中国と西洋の合一を取る態度を子どもにも勧め、「寒士」「家風」を樹立することも忘れていなかった。このことは、常に彼の教育思想の精髓である「趣味」論に強く結ばれ、責任感をもって、人格を鍛えるなかで行われよう子どもにメッセージを伝えた。「私は学問・趣味をたくさん持っている者である。私が専門的にできなかったのはここにあるかもしれない。しかし、私の生活は非常に豊富であって、永遠に飽きない精神を持つことができる。私はいつもあることをやるとき、趣味がまた新しい方向を指ししめてくれ、新しく生命を得た感じがし、まるで朝日が昇るように、蓮が水から顔を出すようである。このような生活は愛すべきもので、極めて価値があるものである。私はあなたたちが私のような氾濫無帰の短所を学ぶことを好まないけれども、少なくとも勢いよく爛漫に向上する長所は学んでほしい。」

このような340通あまりの手紙により、父親の存在、子どもの存在と互いの必要をいつも示していた。このような関心が一つのエネルギーになって、子どもの健全な成長を大いに励ました。手紙では海外での生活・勉強だけではなく国家のこともお互いに意見交換するようにし、人生の哲学もともに語り合った。いつも子どもに自慢をしないこと、弱くならないこと、自分の力でやること、実践しないと自得できない、社会に貢献することを強く要求するが、そのようなことは自分が一生の学問に力点を置いたように「当然あなたたち（子どもたち）もこのような精神をもつことを希望」と望んだ。確信をもつ人生観・価値観を持つようにした。「趣味」のある選択、家・国家・社会に対する責任感、人格の完成、このような総合的な教育観がまさに現在求められている素質—とりわけ家庭内での素質教育につながっているのではなからうか。

梁啓超は1929年1月19日亡くなった。当時、多くの子どもはまだ留学中で、彼の五男思礼は5才にしかならなかった。大人になって有名な科学者になった五男は「私も父親と同じく、趣味主義者である」<sup>46</sup>と誇りを持って父親の教育論の精髓を語った。彼の子ども9人（息子5人、娘4人）は、みな父親の名誉に酔わず、それぞれ自分の選択した道で最善を尽くし、黙々

と「滴自己的汗、吃自己的飯（自分の汗を流して、自分で食べていく）」<sup>47</sup>人間になっていた。そのなかには、建築家、考古学者、図書館専門家、経済学者、ロケット研究者もいるし社会活動者もいる。<sup>48</sup>肝心なことは、この子どもたちが自分の選択した道に夢中になり、責任をもって、最善を尽くしていた点である。

#### 4. まとめと今後の課題

以上、近代中国の知識人梁啓超の人生の後半を表す手紙史料を手がかりに、その時代の知識人が苦悩した教育論と家庭教育を考察してきた。教育と家族の歴史を知ることによって、これまで家庭教育のなかで見落としていたさまざまな問題に気付かされる。梁啓超は、19世紀末から20世紀にかけての社会転換期に中国の多くの知識人と共に中国の社会思潮に影響を与えただけではなく、家庭内でも絶対的な影響力を残した。それは「趣味」による人生の楽しみであり、「責任感」という精神であった。その父親の精神を意識させ、社会のなかで子どもたちがそれぞれ自分の場所を見つけていくことを、自らの「実践」によって教えた一人の普通の人間であり、父親であった。それゆえに、彼の影響はなおさら大きいのではなからうか。梁啓超の人生は同時代の中国の運命を考えた知識人と同じく、悲喜に満ち、紆余曲折があった。矛盾に満ちた中国の近代社会に生きた彼は、多くの面で個人と時代の矛盾に葛藤する側面を教育論および父親としての家庭教育の実践を通して、前の世代が次世代に何を残すべきかを考えさせた人物である。

親である限り、子どもが自分たちを超えて、幸せになり、成功することを願わないものはいないだろう。子どもは親の愛の結晶であり、彼らの生の延長であるからである。問題はいかに子どもに対する期待を現実化するかの問題である。このことは今の素質教育<sup>49</sup>の主な課題でもあるだろう。子どもが成長するなかで、社会に出て自分というものを表現できるようになるには、どういう経験が必要なのだろうか。そして、そのために父親は何をなさなくてはならないのか。客家人<sup>50</sup>の習俗には「父親からは骨、母親からは肉」という、それぞれを受けて人が生まれてくるという生死観があるそうだ。両者がそろわないとこの世の人として生きていくことができないが、死後肉は腐敗してなくなり、骨だけが永遠に残される。残された骨は正しく祭られている限り、風水の気を介して子孫たちに恩恵を施すという意味を表す。一見偶然にみえるが、梁啓

超の子どもたちにはこのような父親の風水の気が介したのではないか。

「趣味」論から出発した梁啓超の人生観は、「中国の伝統を引き継ぎ、西洋の養分を取り込んで、理論と実践によって、また近代的な思惟をもって、伝統的な利他主義の人生観を発展させたものである。」<sup>51</sup>「伝統」と「近代化」の矛盾ではなく、不可分の歴史の有機的な結合であろう。その人生観は、彼の子どもたちに長く引き継がれていた。それは、現在求められている真の素質教育でなかろうか。

今日、家庭内の素質教育の重視については、多くの賛同が得られている。親は子どもの人生の初めての先生でもあり、一生涯の先生でもある。したがって、家庭は人の初めての教室でもあり、一生涯通う教室でもある。親がやるべきことは、梁啓超の論理からいうならば、はっきりした目的を与えることであり、子どもに対する不断の関心、互いの存在を感じさせること、彼らに家・社会において必要な存在であることを意識させることではなかろうか。このことこそ、親の教育の実践であるだろう。梁啓超の教育思想あるいは理念、およびその教育実践の結果として9人の子どもがそれぞれ「趣味」によって学び、また社会に還元させたのは、現在求められている素質教育問題への一つの回答であるだろう。

本論文は、梁啓超の「家書」を史料ベースにしたため、ほかの知識人と比べるとどのような相違点があるかについてはまったく触れることができなかった。また、梁啓超がもつた教育、すなわち「趣味」論の思想全般のなかでの位置づけを追求することもできなかった。この問題を今後の課題として、近代家庭論あるいは家庭教育論の枠組みを明確にすることにつなげていきたい。

(指導教員 今井康雄教授)

## 注

- 1) 丁文江・趙豊田編著『梁啓超年譜長編』島田虔次編訳、岩波書店2004年2月
- 2) 同上
- 3) 『梁啓超与近代中国社会文化』李喜所主编、天津古籍出版社2005年1月
- 4) 梁啓超著『飲水室合集』文集『科学を論ずる』林志鈞編中華書局1989年版
- 5) 梁啓超著『变法通議・女学を論じる』『飲水室文集』上海広智書局1907年
- 6) 林家有著「论梁啓超的社会转型与教育改造思想」『梁啓超与近代中国社会文化』李喜所主编天津古籍出版社2005年1月
- 7) 梁啓超著『教育政策私議』『飲水室合集・文集』中華書局1936年
- 8) 中国で科学技術分野において大いなる貢献をした科学者に与える終身名誉制度である。この制度は1920年末ごろヨーロッパから取り入れた。現在中国科学院(The Chinese Academy of Science)および中国工程院(The Chinese Academy of Engineering)でこの制度を実施している。兩院制度ともいう。
- 9) 建築学者である長男梁思成は新中国の第一期院士に選ばれ、考古学者である次男梁思永も第一期院士に選ばれ、ロケット研究者五男思礼は1987年に院士に選ばれた。
- 10) 丁跃忠著『新闻世界』2006年3期；http://www.hengqing.com 钟庆著『梁啓超成功的家庭教育』2007年4月
- 11) 中国史上科学試験の中、「院試」に合格した受験生を指す。
- 12) 中国史上科学試験の中、「郷試」に合格した受験生を指す。
- 13) 丁文江・趙豊田編著『梁啓超年譜長編』島田虔次編訳、岩波書店2004年2月
- 14) 丁文江・趙豊田編著『梁啓超年譜長編』島田虔次編訳、岩波書店2004年2月
- 15) 梁啓超著「新民説」『飲水室文集』上海広智書局1907年
- 16) 古代には国家レベルの「学校」を指していた。現在での意味は、近代以降、西洋学問に対する中国の学問を指し、それには主に文学・歴史・哲学などが含まれる。
- 17) 梁啓超の「趣味」論を語る時、よく冒頭に使われた論である。たとえば、梁啓超著『飲水室合集・集外文』中冊(夏曉虹編、北京大学出版社)「学問の趣味と趣味の学問」などに見られる。
- 18) 藤堂明保著『漢字語源辞典』学燈社 昭和49年9月
- 19) 呂宏波著「『趣味』範疇と中国美学の近代性」『中南大学学报』(社会科学版)第13巻5期 2007年10月
- 20) 同上
- 21) 梁啓超「趣味論」
- 22) 梁啓超著『飲水室合集・集外文』中冊 夏曉虹編、北京大学出版社2005年
- 23) 同上
- 24) 『梁啓超全集』陳鵬・範曾・李鐸・吳未淳・張品興編、北京出版社1999年7月
- 25) 梁啓超著「学問の趣味と趣味の学問」『飲水室合集・集外文』中冊 夏曉虹編、北京大学出版社2005年
- 26) 梁啓超著「東南大学授業最終講義」『飲水室合集・文集』中華書局1936年
- 27) 梁啓超著『飲水室合集・文集』中華書局1936年
- 28) 清末の軍人、政治家、文人である。本名は曾国藩(1811-1872年)、字が濬生、諡が文正である。彼の作品は『曾文正公全集』、『曾文正公手書日記』に収録されている。
- 29) 梁啓超著「欧遊心影録」『飲水室合集・専集』中華書局1936年
- 30) 梁啓超著『飲水室合集・専集』中華書局1936年
- 31) 牛志平著「中国伝統家庭教育一家訓と家庭内秩序」『儒学と東ア



- ジア文明研究叢書 東アジア伝統家礼, 教育と国法 (一) 家礼, 家礼と教育』高明士編 華東師範大学出版社2008年5月
- 32) 梁啓超著『飲氷室合集』中華書局1936年版
- 33) 梁啓超は、北宋範仲淹の『岳陽樓記』よりこの言葉をとって、自分の人生観を表した。
- 34) 梁啓超著「東南大学授業最終講義」『飲氷室合集・文集』中華書局1936年
- 35) 同上
- 36) 『梁啓超全集』(1-10冊) 陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社 10冊目の第二十一巻に『家書』が収録されている。
- 37) 『梁啓超全集 第二十一巻』陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社1999年7月に基づいてまとめた。
- 38) 1925年7月10日, 1926年2月9日 梁啓超の留学中の子どもへの手紙の中から抜粋(『梁啓超全集 第二十一巻』陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社1999年7月)
- 39) 1927年8月29日, 梁啓超の留学中の子どもへの手紙の中から抜粋(『梁啓超全集 第二十一巻』陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社1999年7月)
- 40) 1926年2月18日, 梁啓超の留学中の子どもへの手紙の中から抜粋(『梁啓超全集 第二十一巻』陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社1999年7月)
- 41) 1927年8月29日, 梁啓超の留学中の子どもへの手紙の中から抜粋(『梁啓超全集 第二十一巻』陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社1999年7月)
- 42) 1927年5月5日, 梁啓超の留学中の子どもへの手紙の中から抜粋(『梁啓超全集 第二十一巻』陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社1999年7月) この中で、特に三男思忠が当時の生活が楽で人格を失うか憂慮だといった時に対する助言である。楽な環境で志がないならば、劣悪な環境でも同じく志がなくなると梁啓超は説得させようとした。
- 43) 1927年5月13日, 長女思順への手紙の中から抜粋(『梁啓超全集 第二十一巻』陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社1999年7月)
- 44) 1927年2月6日~16日, 梁啓超の留学中の子どもへの手紙の中から抜粋(『梁啓超全集 第二十一巻』陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社1999年7月)
- 45) 1927年2月6日~16日, 1927年10月3日~11月15日, 1928年2月13日, 梁啓超の留学中の子どもへの手紙の中から抜粋(『梁啓超全集 第二十一巻』陳鵬・範曾・李鐸・呉未淳・張品興編, 北京出版社1999年7月)
- 46) <http://big5.southcn.com> 南方ネット上。五男 思礼に対するインタビュー「父親の思想で私は一生益を得ている」
- 47) 梁啓超の孫娘である呉荔明は陶行知の話を借りて梁啓超の子どもを一言でまとめた。呉荔明著「梁啓超と彼の子どもたち」『学者追憶叢書 梁啓超への追憶』夏曉虹編, 中国放送出版社1996年10月
- 48) 呉荔明著「梁啓超と彼の子どもたち」『学者追憶叢書梁啓超への追憶』夏曉虹編, 中国放送出版社(1996年10月)に基づいて、梁啓超の子どもたちの履歴を参照として示す。  
長女梁思順(1893-1966), 梁啓超が解説した詩に基づいて『艺衡馆词钞』を編成した。  
長男梁思成(1901-1972), 中国の有名な建築家である。中国建築史の研究を開拓し, 中国清華大学の建築学部を設立した。  
次男梁思永(1904-1954), 中国の有名考古学者であって, 龍山文化遺跡を発見した。  
三男梁思忠(1907-1932), アメリカ陸軍学院と西点軍学校を卒業した。上海での抗日戦争で戦死した。  
次女梁思莊(1908-1986), 図書館学の専門家である。カナダマギル大学とアメリカコロンビア大学を卒業した。  
四男梁思達(1912-2001), 経済学者である。南開大学経済学部を卒業して、『中国近代経済史』を編纂した。  
三女梁思懿(1914-1988), 燕京大学の歴史学部を卒業し, 社会活動家として活躍した。  
四女梁思寧(1916-), 南開大学に1年通い, その後社会活動者として活躍した。  
五男梁思礼(1924-), 中国の有名な宇宙ロケットの研究者である。新中国の第一代目の科学者である。
- 49) 通常中国国内における素質教育は、「応試教育(試験進学のための教育)」に対する概念であって、徳育・知育・体育など全面发展による人格形成を指している。
- 50) 中国の少数民族の一つで、黄河流域の中原から南に移り住みはじめてから形成された民族である。古い中原の文化持ちつつ、教育を重視し、とくに男の教育を重視した伝統がある。
- 51) 方志钦著「梁后超的中庸哲学」『梁后超与近代中国社会文化』李喜所主编, 天津古籍出版社2005年1月